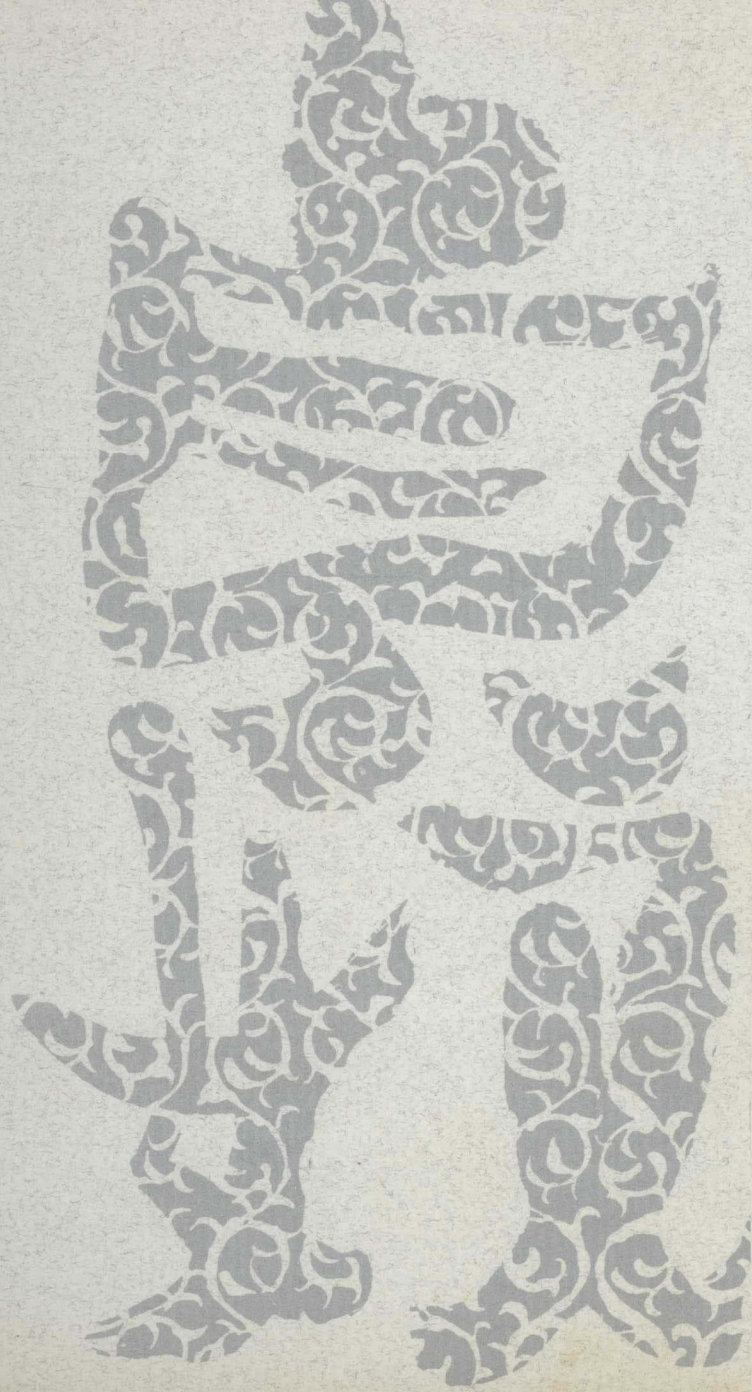




長編小説

マダム貞奴

杉本苑子



マダム貞奴 さだやっこ 長編小説 八五〇円

著者 すぎもとせのこ 杉本苑子

編集人 松田延夫

発行人 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉北区明和町一の二一
〒一〇〇
〒五三〇
〒八〇二

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

第一刷 昭和五十年一月十日

第三刷 昭和五十年五月三十日

©杉本苑子 昭和五十年 落丁本・乱丁本はお取り
替えます。

目

次

x

あいのこと芸者

7

壮士芝居

33

浮沈

60

日本脱出

88

アメリカ珍道中

120

アカデミー三等勲章

155

野菊の別れ

183

装丁 奈良葉二

長編小説 マダム貞奴

あいのこ芸者

芳町の芸者置き屋、浜田屋の女将^{おかみ}は本名を亀吉という。でも、だれもかけでは、おかみさんとも亀吉さんとも呼ばない。『ガチャさん』で通る。

同業の丁字屋^{ちやうじ}の女将が、客につれられて能狂言を見てきて、

「こっけいだっちゃんないのさ」

身ぶり手ぶりで舞台の様子を、町のれんちゅうにしやべったことから生まれた仇名^{あだな}なのだ。

「まぬけな太郎冠者がね、主人に金の値^{かね}を聞いてこいと言いつけられたのをまちがえて、寺めぐりして鐘の音^ねを聞くという狂言なんだけどね、コチーンというのがあるバーンというのがある。

コーン、モンモンモンというのもあるなかで、ひびのはいった破れ鐘^やだけは、ガチャガチャガチャと鳴るんだよ。とたんに浜田屋のおかみさんの大声を思い出してさ、腹の皮をよじつちまった。はははは」

——以来、「ガチャさん」といえば亀吉さんで通る蛮声を、今日も彼女はのど一杯にはりあげて、

「奴やつこオ……奴はどうしたい？ どこへいったんだい？ だれか奴を知らないか？」

家の中じゅう、どたばた走り廻っていた。

「うんざりするわねえ、この暑さにさ。ガチャさんのあのがなりがなり声を聞いていると……」

白粉おしろい刷毛はけの手をとめて芸者たちは、もろ肌ぬぎの肩をこっそりすくめ合う。

ながい夏の日はやっと暮れかけて、あちこち、軒灯けんとうにも火がはいり、色町はそろそろ活気づき始める時刻であった。浜田屋でも芸者たちは、みな出の仕度にいそがしい。亀吉の問いかけに返事する者もろくにいない。下地したぢッ子の一人が小さく、

「奴姐むえさんなら大川じゃないかしら……」

ひとりごちるのを聞きたがめて、

「大川？ 泳ぎにかい？ こんな遅くまで……」

亀吉の目じりがつりあがった。

「ええ、しょうがない。奴のおてんばにもこまったもんだ。——つれもどしておいで君蝶」

「はあい」

とんで出てゆくしろ姿を見送って、

「浜田屋の奴といえば、総理大臣・伊藤博文公のご寵愛ちやうあいをひとりじめにしている芳町一番の看板芸者……。それが馬車屋から馬を借りて乗り廻す、玉突きはする、水泳ぎまでしてのけるじゃ、私もつくづく手を焼くよ。溺れおぼれでもしてごらん、もとも子もないからねえ」

だれへともない亀吉の愚痴ぐちに、

「奴ちゃんこのごろ、荒れてますね。花札賭博、役者狂い……。ふだんのおてんばとは、すこしたちがちがうようですよ」

芸者の一人が言いかけたとき、

「おかみさんッ、奴姐さんがぐしょ濡れの裸のまんま、どこかの男の人におぶさって帰ってきましたよッ」

たった今、出ていったばかりの下地ッ子が、キンキン声をさきだてて馳けもどってきた。

「なんだって？」

これには家じゅうが総立ちになった。

「溺れおぼれでもしたらもとも子もない……」

この、亀吉の杞憂きゆうが的中したのである。

奴は死に損った。泳いでいるうちに、ふいに右の手足の自由を失った。つれたのだ。岸を通りかかった男が、とびこんで助けてくれなかったら、どうなっていたかわからない。

いわば命の恩人なのに、玄関の、上りがまちにおろされると彼女はツンツンして、男にひと言の礼も言わず、女中や芸者たちに支えられながら奥へはいってしまった。

背に垂らしたゆたかな髪から、まだ滴がしたたっている。西洋かぶれした水着を奴は持っているが、今日は白い晒さらしの腰巻できっちり胸を巻き、乳房のもりあがりをかくしていた。むき出しの肩と、両腕が、脂をうかしてつややかに光る。きめのこまかさ、肌の白さはまぶしいほどだ。

この姿で白昼、隅田川を泳ぐのだから、当然、物議をかもした。評判にもなった。注意しにきた巡査に、しかし奴は、

「男が泳いでる大川で、女が泳いじゃいけないって法律でもあるのッ」

タンカを切った。巡査のほうも、この若い、美貌の芸者が、総理大臣をうしろ楯だてに持っているのをまもなく知って、見て見ないふりをするようになった。

「それほど水遊びがしたければ海へ行け。大磯の濤竜館に部屋を借りてやる」

と伊藤博文が妥協案を出した。海水浴ということだが、欧米渡りのハイカラな避暑法、健康法の一つとして、日本の有閑階級の口にものはじめ、大磯海岸がその最適地のように見なされ

ていた当時である。

下ばきに、長袖つきのワンピースを組み合せたような、舶来ものの海水着も、いざ着るとなると勇気がいるが、奴は平気だったし、瀟電館では浴室を石けんの泡だらけにして、他の泊り客の眉をひそめさせる傍若無人ぶりさえ發揮した。

「そのかわり、もうこんりんぎい、大川では泳ぐなって、くどくど申しつけておいたんですよ。それをいつのまにかまた、ぬけ出して……」

座敷へ招じあげた「命の恩人」を前に、亀吉はこぼした。こきおろしながら言葉のうらには、養女扱いしている奴への、かくしようもない自慢もほの見える。

「いやあ、おかげで僕も、天下の美妓びぎの濡れ肌を抱く光榮にあずかれたわけですから……」

と、男は笑った。ゆきも丈もやや短い借りものの白紵がすりをきゅうくつに着ながら、態度はいかにも磊落らいらくだし、苦みのきいた、なかなかの偉丈夫だ。年は二十七か、八か。そのくせ口つきには、どこか書生っぽじみた素朴さ、パンカラさも匂っている。

「失礼ですがあなたさま、ご商売は？」

「僕ですか？ 芸人です」

思いがけない答に「ガチャさん」が目をまるくしているとき、これも藍地の、涼しげな浴衣に

着かえた奴が二階からおりてきて、

「まだいたの？ あんた。——帰ってよッ」

敷居ぎわに突っ立ったまま男を睨みつけた。亀吉はけしきばんだ。

「奴、なんだいその、口のききざまは……。それが一命を助けてくださったお方への、言い草かい？」

きめつけても返事をしない。あきらかに奴は怒っている。怒り顔がまた、うつくしい。

重そうなほどたっぷりある髪は、ほんの少し亜麻色あまがかって見える。目じり目がしらとも切っ込みが深く、形のよさ、大きさ、ともに類のない両眼も、ひとみは少々茶がかったいた。

姿勢がまた、ばかにいい。首すじ背すじをシャンと伸ばし、ゆたかな胸をそらして歩く。さらにその、からだつきだ。日本の女にはめずらしく、胴みじかだし腰が緊って、すらりと気持よく脚が長い。

つまりいえば異国ふうな、それだけに取りつきにくく愛嬌あいせうにとぼしい、しかしどこから見ても堂々とした、品のよい美貌であることにまちがいない女なのである。

「浜田屋の奴は、あいのこじゃないのか」

「どうもちょっと、日本人ばなれしているねえ。あいのこ芸者だよ、ありゃあ……」

嫉^{ねた}み半分のそしり口も、だからこそ生まれるわけだが、彼女の血に混^まりけはない。芝神明に葉、書籍の販売をかねて質屋をいとなむ小山久次郎の、末娘に生まれて、名は貞^{さだ}という。

店は屋号を『小熊』とよばれ、旧幕時代は、日本橋の両替町で町役なども勤めた大商人だが、家附き娘だった実母のおたかが、久次郎を婿^{むこ}に迎えてから、家運はじりじり傾きはじめた。『ほとけの久さん』と仇名されたほど久次郎はお人よしで、他人に騙^{だま}されやすく、加えて、十二人もの子でくさんである。尻つぼまりに、くらし向きが詰まって行っただのもむりないが、でもまだ、よちよち歩きの幼女のころは、お貞も、お乳母日傘で育てられた。

貧苦がせまって、いよいよ、どうにもならなくなったのは明治十二年……お貞が七歳のときだった。背に腹はかえられなくなって小山夫婦は、末っ子のお貞を芳町の浜田屋へ、養女にやった。芸者の下地ッ子——。証文^{しやうもん}づらはうつくしく、やった、もらったの形式をとっても、裏で金の受け渡しがあったことはいうまでもない。人身売買である。

女将の亀吉は、二十九から後家を通して、女手に置屋を経営し、芳町でも一、二の羽ぶりをきかせているしっかり者だ。ひと目で少女のお貞に惚^ほれこみ、気性も勝気なら頭^{わいり}も伶俐、顔だち姿つきはもちろん上々という、いわば掘り出しものの娘へ、芸者ひととおりの芸事ばかりでなく、一流とよばれるにふさわしい氣^きっぷうまで、ぞんぶんに叩きこんだ。

鼻っぱしが強く、誇り高く、こわいもの知らずなおキャンな売れっ妓が、こうしてできあがったが、知的な素養は、お貞にはなかった。

旧制の小学校令が布かれたのが、明治十九年——。寺子屋から出発した個人管理の私立小学校が、その前からもなくてはなかったけれども、

「芸者に学問はかえって邪魔だよ。読み書きそろばんなんぞ習うひまがあったら、三味線や踊りの稽古に精をお出し」

と、置屋の女将の感覚からすれば、亀吉がわざわざ月謝を払ってまで、私立の小学校にお貞を通わせなかったのも奇異とするにあたらない。

名妓の名を、めったな後継者につがせないのは、花柳界のしきたりである。あたらしい名を汚されてはたまらないからだ。新橋では「ぼんた」芳町では「奴」がそれに当る。初代の奴は論客、福地桜痴に愛されたが結核にかかって若死した。容姿も気だても、折り紙つきの名妓であった。

亀吉はこの名をお貞に与えた。十四歳で、はじめてお座敷へ出たときが小妓、十七歳でひろめして、一本立ちになったとき奴を継いだ。水揚げを伊藤博文にたのみ、名実ともに、押しも押されもしない足場を、奴のために作ってやったのも亀吉である。